

ムハエホバの座位と稱へられ萬國の民こゝに集るべし即ちエホバの名およりてエホバに集り重て其惡き心の剛憤するに去たがひて行きさるべしこの時エホバの家イスラエルの家どもにも行みて北の地よりいで我々をからず祖たちと與へて歸れども地に借にきたるべし我のへり嗚呼われのかにして汝を諸子の中に置き吾國の中で最も美き產業なる此美地を汝にわたしたと我またいへり汝われを我父とよび亦我を離れざるべしと然にイスラエルの家と妻の誓に違てその夫を棄るがごとく汝等われに背けりとエホバはいひたまへん巖山のうへに開け是ハイスラエルの民の悲み祈るあり蓋彼等まがれる途におゆみ其神エホバを忘れなかり背ける諸子よ我を歸れわれ汝の退還をいやさ九祿よ我儂なんぢに到る汝われらの神エホバなればなり信に諸の岡と谷はくの山に救を望めいたつらなり誠にイスラエルの救ハ年および其子らの女を吞尽せりわれらら羞恥に即し我らハ恥辱に覆へるべしこの我儂とわれらの列祖ハ我らの幼時より今日にいたるまで罪をわれらの神エホバに犯し我儂の神エホバの誓に違へざればなり

第二節 エホバはいひたまへんイスラエルよ汝も歸らば我に歸れ汝も憎むべき者我前より除かば洗滌はじ かつ汝ハ眞實と正直と公義とをもてエホバハ活くど誓えんざらば萬國の民ハ彼によりて祝福をうけ彼によりて誇るべし エホバエホバエホバの人々にかくいひたまへ汝等の新田を耕せ荆棘のの中に種くふかれ 汝の人々エホバに住める者汝等みづから割禮を乞ふてエホバに屬さば心の前の皮を去れ然らざれば汝等の惡行のためわが怒火の如くに發して燃えんこれを滅するものかか

るべし ○ 汝等エホバに告げエホバに示していへ汝を國の中に吹けとまた大聲に呼はりていへ汝等わ

千九百九十九
千九百九十八
千九百九十七
千九百九十六
千九百九十五
千九百九十四
千九百九十三
千九百九十二
千九百九十一
千九百九十
千九百八十九
千九百八十八
千九百八十七
千九百八十六
千九百八十五
千九百八十四
千九百八十三
千九百八十二
千九百八十一
千九百八十
千九百七十九
千九百七十八
千九百七十七
千九百七十六
千九百七十五
千九百七十四
千九百七十三
千九百七十二
千九百七十一
千九百七十
千九百六十九
千九百六十八
千九百六十七
千九百六十六
千九百六十五
千九百六十四
千九百六十三
千九百六十二
千九百六十一
千九百六十
千九百五十九
千九百五十八
千九百五十七
千九百五十六
千九百五十五
千九百五十四
千九百五十三
千九百五十二
千九百五十一
千九百五十
千九百四十九
千九百四十八
千九百四十七
千九百四十六
千九百四十五
千九百四十四
千九百四十三
千九百四十二
千九百四十一
千九百四十
千九百三十九
千九百三十八
千九百三十七
千九百三十六
千九百三十五
千九百三十四
千九百三十三
千九百三十二
千九百三十一
千九百三十
千九百二十九
千九百二十八
千九百二十七
千九百二十六
千九百二十五
千九百二十四
千九百二十三
千九百二十二
千九百二十一
千九百二十
千九百一十九
千九百一十八
千九百一十七
千九百一十六
千九百一十五
千九百一十四
千九百一十三
千九百一十二
千九百一十一
千九百一十
千九百九
千九百八
千九百七
千九百六
千九百五
千九百四
千九百三
千九百二
千九百一
千九百

つされ我儂堅き邑にゆくべしとシオンに指示す合圖の旗をたてよ逃よ留る勿れり我北より災とあはなる敗壞をきたらすればかり獅子ハ其森よりいでり國々を滅すもの進みきたる彼汝の國を荒らんとて既にこの處よりいでたり汝の諸邑ハ滅びて住む者おきに至らん この故に汝等麻の衣を身にさして悲み哭けりエホバの烈き怒りぞ我儂を離れざればなり エホバはいひたまひけるこの日王と叔伯等ハこの心をうしなひ祭司ハ驚き預言者ハ異むべし 我はいひけるハ嗚呼主エホバよ汝ハかくに此民とエホバを大いにおぎむきたまふすなは汝ハなち安んずるべしと云給ひしに劍にまでかよへりこの時この民とエホバにいふものあらん熱き風曠野の巖山よりわが民の女にふききたると此ハ驚るためにわらず深むる爲にもあざるなり これよりも猶はげしき風われより來らん今われらに轡を而さん 夫も彼の雲のごとく上りきたらん其車ハ風ののごとくにしてその馬ハ聲よりも疾し嗚呼われらハ祈るかな我儂滅ざるべし エホバよ汝の心の惡をあらひ潔めよ然ぞすくえられ汝の惡き念いつまで汝のうちにあや 汝により告ぐる聲ありエホバの山より災を知るなり なんぢら國の民に告げたまへんエホバに知らせよ汝めかてむ者遠き國より來りエホバの諸邑にむかひて其聲を揚ぐと彼らハ田圃をまもる者れごとくこれに圍ひて我に從せざるに由るごエホバはいひ給ふ汝汝汝と汝が行これ汝に招けりこれ汝惡き心誠に苦くして汝の心におよぶ ○ 嗚呼わが腸よ我腸よ痛よ痛よ苦心に底におよぶわが心胸とろくわれ歎しがたし我靈魂よ汝汝汝軍に闘をきくべし 取滅に取滅に汝らせありこの地ハ皆荒れわが幕屋ハ頃刻にやぶらる我幕ハ忽ち破られたり 我が旌をみ鑑れ聲をさくハ何時までや うれ我民ハ愚にして我を誹らす拙き子等にして曉ることなし彼らハ惡を行ふに智

千九百九十九
千九百九十八
千九百九十七
千九百九十六
千九百九十五
千九百九十四
千九百九十三
千九百九十二
千九百九十一
千九百九十
千九百八十九
千九百八十八
千九百八十七
千九百八十六
千九百八十五
千九百八十四
千九百八十三
千九百八十二
千九百八十一
千九百八十
千九百七十九
千九百七十八
千九百七十七
千九百七十六
千九百七十五
千九百七十四
千九百七十三
千九百七十二
千九百七十一
千九百七十
千九百六十九
千九百六十八
千九百六十七
千九百六十六
千九百六十五
千九百六十四
千九百六十三
千九百六十二
千九百六十一
千九百六十
千九百五十九
千九百五十八
千九百五十七
千九百五十六
千九百五十五
千九百五十四
千九百五十三
千九百五十二
千九百五十一
千九百五十
千九百四十九
千九百四十八
千九百四十七
千九百四十六
千九百四十五
千九百四十四
千九百四十三
千九百四十二
千九百四十一
千九百四十
千九百三十九
千九百三十八
千九百三十七
千九百三十六
千九百三十五
千九百三十四
千九百三十三
千九百三十二
千九百三十一
千九百三十
千九百二十九
千九百二十八
千九百二十七
千九百二十六
千九百二十五
千九百二十四
千九百二十三
千九百二十二
千九百二十一
千九百二十
千九百一十九
千九百一十八
千九百一十七
千九百一十六
千九百一十五
千九百一十四
千九百一十三
千九百一十二
千九百一十一
千九百一十
千九百九
千九百八
千九百七
千九百六
千九百五
千九百四
千九百三
千九百二
千九百一
千九百

我かにも善を行ふことを知すわれ地を見るに形なくして空ありて空ありて天を仰ぐに其處に光なし我出を見ればも皆靈入まら諸ヶ丘も動けり我身も皆飛せり我みるに肥美なる地あり淵邊あり且つ諸ヶ丘ハ五ヶ丘はけ前にうたれ烈しき怒れ前に豊たれたりうハ五ヶ丘かくいひたまへりすべて此地ハ荒地と云らなされど我こそとくハ之を滅せし故に地ハ皆裏しみよ上なる天ハ暗くからん我すて之を以て且之を以て悔ひたまはす之をなす事を止さればなり邑ハ人か騎兵と與者ハ咄嗟にためめに逃て叢林に入り又岩け上に升れり邑ハみな棄ちられて其處に住む人なし滅せられたる者ハ汝何をかさんとするや故令汝くらぬの衣を金具飾物をもて身を粧ひ目をぬりて大くするとも汝が身を粧ふりいたづらなり汝は戀人らハ汝をいやしめ汝はいのちを索るかりわれ子をつまひ締めてとき唇首子をうむ者の苦むがごとき聲を聞く是れハソツの女の聲なりかれ自ら懸き手をのべていん嗚呼われハ恥あるか我靈魂殺す者のためには滅はれてぬ

汝等エルサレムの邑をめぐりて視且つ察りて視を尋よ汝等もし一人の公義を行ハ真理を求る者に達すべわれ之(エルサレム)を赦すべし彼ハエホバと活くといふ人ども實ハ偽りて善ふかりエホバハ汝の目の誠實を顧みたるにわらず汝彼らに執せざる痛苦をおぼゆ善彼等を滅せどもかれら懲治をうけず其面を禦りも破くして歸ることを拒めり故我いひけるハ此輩ハ惟いやしき愚なる者なればエホバの途と其神の轡を知ざるなりわれ貴人ハ仰きて之を語らんかれらハエホバの途と其神の轡を知るかり然も彼らも皆轡を折り轡を斷り故森林よりいづる獅子ハ彼らを殺しアラバの狼ハかれらを滅し狩ハの邑をねらふ此處よりいづる者ハ皆裂るべし其罪おぼゆるの背違はなばたじけれバなり

一節 九
二節 一〇
三節 一一
四節 一二
五節 一三
六節 一四
七節 一五
八節 一六
九節 一七
一〇節 一八
一一節 一九
一二節 二〇
一三節 二一
一四節 二二
一五節 二三
一六節 二四
一七節 二五
一八節 二六
一九節 二七
二〇節 二八
二一节 二九
二二節 三〇
二三節 三一
二四節 三二
二五節 三三
二六節 三四
二七節 三五
二八節 三六
二九節 三七
三〇節 三八
三一節 三九
三二節 四〇
三三節 四一
三四節 四二
三五節 四三
三六節 四四
三七節 四五
三八節 四六
三九節 四七
四〇節 四八
四一节 四九
四二節 五〇
四三節 五一
四四節 五二
四五節 五三
四六節 五四
四七節 五五
四八節 五六
四九節 五七
五〇節 五八
五一節 五九
五二節 六〇
五三節 六一
五四節 六二
五五節 六三
五六節 六四
五七節 六五
五八節 六六
五九節 六七
六〇節 六八
六一節 六九
六二節 七〇
六三節 七一
六四節 七二
六五節 七三
六六節 七四
六七節 七五
六八節 七六
六九節 七七
七〇節 七八
七一節 七九
七二節 八〇
七三節 八一
七四節 八二
七五節 八三
七六節 八四
七七節 八五
七八節 八六
七九節 八七
八〇節 八八
八一節 八九
八二節 九〇
八三節 九一
八四節 九二
八五節 九三
八六節 九四
八七節 九五
八八節 九六
八九節 九七
九〇節 九八
九一节 九九
九二節 一〇〇
九三節 一〇一
九四節 一〇二
九五節 一〇三
九六節 一〇四
九七節 一〇五
九八節 一〇六
九九節 一〇七
一〇〇節 一〇八
一〇一节 一〇九
一〇二節 一一〇
一〇三節 一一一
一〇四節 一一二
一〇五節 一一三
一〇六節 一一四
一〇七節 一一五
一〇八節 一一六
一〇九節 一一七
一一〇節 一一八
一一一节 一一九
一一二節 一二〇
一一三節 一二一
一一四節 一二二
一一五節 一二三
一一六節 一二四
一一七節 一二五
一一八節 一二六
一一九節 一二七
一二〇節 一二八
一二一节 一二九
一二二節 一三〇
一二三節 一三一
一二四節 一三二
一二五節 一三三
一二六節 一三四
一二七節 一三五
一二八節 一三六
一二九節 一三七
一三〇節 一三八
一三一節 一三九
一三二節 一四〇
一三三節 一四一
一三四節 一四二
一三五節 一四三
一三六節 一四四
一三七節 一四五
一三八節 一四六
一三九節 一四七
一四〇節 一四八
一四一节 一四九
一四二節 一五〇
一四三節 一五一
一四四節 一五二
一四五節 一五三
一四六節 一五四
一四七節 一五五
一四八節 一五六
一四九節 一五七
一五〇節 一五八
一五一节 一五九
一五二節 一六〇
一五三節 一六一
一五四節 一六二
一五五節 一六三
一五六節 一六四
一五七節 一六五
一五八節 一六六
一五九節 一六七
一六〇節 一六八
一六一節 一六九
一六二節 一七〇
一六三節 一七一
一六四節 一七二
一六五節 一七三
一六六節 一七四
一六七節 一七五
一六八節 一七六
一六九節 一七七
一七〇節 一七八
一七一节 一七九
一七二節 一八〇
一七三節 一八一
一七四節 一八二
一七五節 一八三
一七六節 一八四
一七七節 一八五
一七八節 一八六
一七九節 一八七
一八〇節 一八八
一八一節 一八九
一八二節 一九〇
一八三節 一九一
一八四節 一九二
一八五節 一九三
一八六節 一九四
一八七節 一九五
一八八節 一九六
一八九節 一九七
一九〇節 一九八
一九一节 一九九
一九二節 二〇〇
一九三節 二〇一
一九四節 二〇二
一九五節 二〇三
一九六節 二〇四
一九七節 二〇五
一九八節 二〇六
一九九節 二〇七
二〇〇節 二〇八
二〇一节 二〇九
二〇二節 二一〇
二〇三節 二一一
二〇四節 二一二
二〇五節 二一三
二〇六節 二一四
二〇七節 二一五
二〇八節 二一六
二〇九節 二一七
二一〇節 二一八
二一一節 二一九
二一二節 二二〇
二一三節 二二一
二一四節 二二二
二一五節 二二三
二一六節 二二四
二一七節 二二五
二一八節 二二六
二一九節 二二七
二二〇節 二二八
二二一节 二二九
二二二節 二三〇
二二三節 二三一
二二四節 二三二
二二五節 二三三
二二六節 二三四
二二七節 二三五
二二八節 二三六
二二九節 二三七
二三〇節 二三八
二三一節 二三九
二三二節 二四〇
二三三節 二四一
二三四節 二四二
二三五節 二四三
二三六節 二四四
二三七節 二四五
二三八節 二四六
二三九節 二四七
二四〇節 二四八
二四一节 二四九
二四二節 二五〇
二四三節 二五一
二四四節 二五二
二四五節 二五三
二四六節 二五四
二四七節 二五五
二四八節 二五六
二四九節 二五七
二五〇節 二五八
二五一节 二五九
二五二節 二六〇
二五三節 二六一
二五四節 二六二
二五五節 二六三
二五六節 二六四
二五七節 二六五
二五八節 二六六
二五九節 二六七
二六〇節 二六八
二六一節 二六九
二六二節 二七〇
二六三節 二七一
二六四節 二七二
二六五節 二七三
二六六節 二七四
二六七節 二七五
二六八節 二七六
二六九節 二七七
二七〇節 二七八
二七一節 二七九
二七二節 二八〇
二七三節 二八一
二七四節 二八二
二七五節 二八三
二七六節 二八四
二七七節 二八五
二七八節 二八六
二七九節 二八七
二八〇節 二八八
二八一节 二八九
二八二節 二九〇
二八三節 二九一
二八四節 二九二
二八五節 二九三
二八六節 二九四
二八七節 二九五
二八八節 二九六
二八九節 二九七
二九〇節 二九八
二九一节 二九九
二九二節 三〇〇
二九三節 三〇一
二九四節 三〇二
二九五節 三〇三
二九六節 三〇四
二九七節 三〇五
二九八節 三〇六
二九九節 三〇七
三〇〇節 三〇八
三〇一节 三〇九
三〇二節 三一〇
三〇三節 三一〇

ければも善を行ふことを知すわれ地を見るに形なくして空ありて空ありて天を仰ぐに其處に光なし我出を見ればも皆靈入まら諸ヶ丘も動けり我身も皆飛せり我みるに肥美なる地あり淵邊あり且つ諸ヶ丘ハ五ヶ丘はけ前にうたれ烈しき怒れ前に豊たれたりうハ五ヶ丘かくいひたまへりすべて此地ハ荒地と云らなされど我こそとくハ之を滅せし故に地ハ皆裏しみよ上なる天ハ暗くからん我すて之を以て且之を以て悔ひたまはす之をなす事を止さればなり邑ハ人か騎兵と與者ハ咄嗟にためめに逃て叢林に入り又岩け上に升れり邑ハみな棄ちられて其處に住む人なし滅せられたる者ハ汝何をかさんとするや故令汝くらぬの衣を金具飾物をもて身を粧ひ目をぬりて大くするとも汝が身を粧ふりいたづらなり汝は戀人らハ汝をいやしめ汝はいのちを索るかりわれ子をつまひ締めてとき唇首子をうむ者の苦むがごとき聲を聞く是れハソツの女の聲なりかれ自ら懸き手をのべていん嗚呼われハ恥あるか我靈魂殺す者のためには滅はれてぬ

汝等エルサレムの邑をめぐりて視且つ察りて視を尋よ汝等もし一人の公義を行ハ真理を求る者に達すべわれ之(エルサレム)を赦すべし彼ハエホバと活くといふ人ども實ハ偽りて善ふかりエホバハ汝の目の誠實を顧みたるにわらず汝彼らに執せざる痛苦をおぼゆ善彼等を滅せどもかれら懲治をうけず其面を禦りも破くして歸ることを拒めり故我いひけるハ此輩ハ惟いやしき愚なる者なればエホバの途と其神の轡を知ざるなりわれ貴人ハ仰きて之を語らんかれらハエホバの途と其神の轡を知るかり然も彼らも皆轡を折り轡を斷り故森林よりいづる獅子ハ彼らを殺しアラバの狼ハかれらを滅し狩ハの邑をねらふ此處よりいづる者ハ皆裂るべし其罪おぼゆるの背違はなばたじけれバなり

三〇二節 二九八
三〇三節 二九九
三〇四節 三〇〇
三〇五節 三〇一
三〇六節 三〇二
三〇七節 三〇三
三〇八節 三〇四
三〇九節 三〇五
三一〇節 三〇六
三一一节 三〇七
三一二節 三〇八
三一三節 三〇九
三一四節 三一〇
三一五節 三一〇
三一六節 三一〇
三一七節 三一〇
三一八節 三一〇
三一九節 三一〇
三二〇節 三一〇
三二一节 三一〇
三二二節 三一〇
三二三節 三一〇
三二四節 三一〇
三二五節 三一〇
三二六節 三一〇
三二七節 三一〇
三二八節 三一〇
三二九節 三一〇
三三〇節 三一〇
三三一節 三一〇
三三二節 三一〇
三三三節 三一〇
三三四節 三一〇
三三五節 三一〇
三三六節 三一〇
三三七節 三一〇
三三八節 三一〇
三三九節 三一〇
三四〇節 三一〇
三四一节 三一〇
三四二節 三一〇
三四三節 三一〇
三四四節 三一〇
三四五節 三一〇
三四六節 三一〇
三四七節 三一〇
三四八節 三一〇
三四九節 三一〇
三五十節 三一〇
三五二節 三一〇
三五三節 三一〇
三五四節 三一〇
三五五節 三一〇
三五六節 三一〇
三五七節 三一〇
三五八節 三一〇
三五九節 三一〇
三六〇節 三一〇
三六一節 三一〇
三六二節 三一〇
三六三節 三一〇
三六四節 三一〇
三六五節 三一〇
三六六節 三一〇
三六七節 三一〇
三六八節 三一〇
三六九節 三一〇
三七〇節 三一〇
三七一节 三一〇
三七二節 三一〇
三七三節 三一〇
三七四節 三一〇
三七五節 三一〇
三七六節 三一〇
三七七節 三一〇
三八〇節 三一〇
三八一节 三一〇
三八二節 三一〇
三八三節 三一〇
三八四節 三一〇
三八五節 三一〇
三八六節 三一〇
三八七節 三一〇
三八八節 三一〇
三八九節 三一〇
三九〇節 三一〇
三九一节 三一〇
三九二節 三一〇
三九三節 三一〇
三九四節 三一〇
三九五節 三一〇
三九六節 三一〇
三九七節 三一〇
三九八節 三一〇
三九九節 三一〇
四〇〇節 三一〇

れを騙るあたざるなり。然るわこの民ハ昔且懼れる心あり。既に昔去りて去れり。彼らハまた形儻小雨をあたへて秋の雨と春の雨を晴かたがひて下し我儻のため小收種の時節を定めたまへる我神エホバを畏るべし。其心おいとざるあり。汝等の愆等の愆てこれらの事を退け汝等の罪ハ嘉物を汝らに來らしめざり。我民のうち惡者あり。繩を張る者のごとく。己身をかめてうかゞ以罟を置て人をとらふ。鸞籠小鳥の籠るがごとく。不義の男彼らの家充つこの故。彼らハ大なる者となり。富る者どなる。彼ら之肥て光澤あり。其惡き行ハ甚し。彼らハ孤をたゞさす。孤の詠を亂さずして利達を之。貧者之訴を輔かす。エホバハひ給ふ。われかくの。ごときことを罰せざらんや。我心ハ是のごとき民に仇を復さざらんや。この地ハ驚くべき事と憎むべきこと行てる。預言者ハ儻りて預言をなじ祭司ハ彼らの手によりて治め我民ハ欺る事を變ず。されど汝等の終ハ何をなさんとすや。

ベニヤミンの子等エホバの軍の中より逃れテコラに鎗をふきベテハンレムに合圖の火をわげよ。北より來て大なる敗壞のすめハなり。われ美き窮寇なるシオンの女を滅さん。收者ハ其群を牽べし。起われ。日午にのぼらん。嗚呼惜かな。日ハや長き。夕日の影長くなれり。起われ。夜の間ハのぼりて。この諸の殿舎を毀たん。萬軍の軍。エホバかくひたまへり。汝ら櫓をきり。エホバ向ひて。砲を築け。これハ罪すべき邑なり。ろの中に。唯暴逆のみあり。源の水をいだすがごとく。彼らの惡を流す。この中ハ暴逆と威虐と。て。我前も憂と傷た。之。エホバ。汝。訓戒をうけ。然らざれば。我心汝を以なれ。汝を荒蕪と。あし。住む人なき地と。あさな。萬軍の軍。エホバかくひたまへり。葡萄の遺餘を摘みとる。ごどく。

ミ 卷四十七 耶利米書 四十七 五 一
 四十七 五 一 耶利米書 四十七 五 一
 四十七 五 二 耶利米書 四十七 五 二
 四十七 五 三 耶利米書 四十七 五 三
 四十七 五 四 耶利米書 四十七 五 四
 四十七 五 五 耶利米書 四十七 五 五
 四十七 五 六 耶利米書 四十七 五 六
 四十七 五 七 耶利米書 四十七 五 七
 四十七 五 八 耶利米書 四十七 五 八
 四十七 五 九 耶利米書 四十七 五 九
 四十七 五 十 耶利米書 四十七 五 十
 四十七 五 十一 耶利米書 四十七 五 十一
 四十七 五 十二 耶利米書 四十七 五 十二
 四十七 五 十三 耶利米書 四十七 五 十三
 四十七 五 十四 耶利米書 四十七 五 十四
 四十七 五 十五 耶利米書 四十七 五 十五
 四十七 五 十六 耶利米書 四十七 五 十六
 四十七 五 十七 耶利米書 四十七 五 十七
 四十七 五 十八 耶利米書 四十七 五 十八
 四十七 五 十九 耶利米書 四十七 五 十九
 四十七 五 二十 耶利米書 四十七 五 二十
 四十七 五 二十一 耶利米書 四十七 五 二十一
 四十七 五 二十二 耶利米書 四十七 五 二十二
 四十七 五 二十三 耶利米書 四十七 五 二十三
 四十七 五 二十四 耶利米書 四十七 五 二十四
 四十七 五 二十五 耶利米書 四十七 五 二十五
 四十七 五 二十六 耶利米書 四十七 五 二十六
 四十七 五 二十七 耶利米書 四十七 五 二十七
 四十七 五 二十八 耶利米書 四十七 五 二十八
 四十七 五 二十九 耶利米書 四十七 五 二十九
 四十七 五 三十 耶利米書 四十七 五 三十
 四十七 五 三十一 耶利米書 四十七 五 三十一
 四十七 五 三十二 耶利米書 四十七 五 三十二
 四十七 五 三十三 耶利米書 四十七 五 三十三
 四十七 五 三十四 耶利米書 四十七 五 三十四
 四十七 五 三十五 耶利米書 四十七 五 三十五
 四十七 五 三十六 耶利米書 四十七 五 三十六
 四十七 五 三十七 耶利米書 四十七 五 三十七
 四十七 五 三十八 耶利米書 四十七 五 三十八
 四十七 五 三十九 耶利米書 四十七 五 三十九
 四十七 五 四十 耶利米書 四十七 五 四十
 四十七 五 四十一 耶利米書 四十七 五 四十一
 四十七 五 四十二 耶利米書 四十七 五 四十二
 四十七 五 四十三 耶利米書 四十七 五 四十三
 四十七 五 四十四 耶利米書 四十七 五 四十四
 四十七 五 四十五 耶利米書 四十七 五 四十五
 四十七 五 四十六 耶利米書 四十七 五 四十六
 四十七 五 四十七 耶利米書 四十七 五 四十七
 四十七 五 四十八 耶利米書 四十七 五 四十八
 四十七 五 四十九 耶利米書 四十七 五 四十九
 四十七 五 五十 耶利米書 四十七 五 五十

エラエルの遺れる者を擧どり。汝葡萄を摘取者のごとく。屨手を筐か入るべし。我たれ。誰を警めて。さかしめんや。祝。よろの。耳ハ。割禮をうけざるによりて。聽えず。彼らハ。エホバの。言を。剛けり。これ。を。悦。ん。ず。エ。ホバの。怒。わ。が。身。に。充。つ。わ。れ。忍。ぶ。に。倦。む。此。れ。を。備。衛。わ。ある。童子。と。集。む。年。少。者。と。お。推。す。べ。し。夫。も。婦。も。老。れ。る。者。も。年。邁。じ。者。も。執。へ。ら。る。に。いた。ら。ん。の。家。と。田。地。と。妻。ハ。と。も。お。伴。人。に。わ。た。ら。ん。其。ハ。わ。れ。手。を。擧。て。この。地。お。住。る。者。を。撃。つ。ハ。か。り。と。エ。ホ。バ。ハ。い。ひ。た。ま。ふ。夫。彼。ら。ハ。少。き。者。より。大。なる。者。に。いた。る。ま。で。皆。貧。窮。者。なり。又。預。言。者。よ。り。祭司。に。いた。る。ま。で。皆。詭。詐。を。な。す。者。な。れ。心。なり。か。れ。ら。に。淺。く。我。民。の。女。の。傷。を。醫。じ。平。康。か。ら。む。る。時。に。平。康。平。康。と。い。へ。り。彼。ら。ハ。憎。む。ひ。び。き。事。を。爲。て。恥。辱。を。う。く。れ。ど。も。毫。も。恥。ず。ま。た。愧。を。知。ら。ず。この。故。に。彼。ら。ハ。傾。仆。る。者。と。信。じ。た。ま。ふ。れ。ん。我。來。る。と。き。彼。ら。躓。か。んと。エ。ホ。バ。ハ。い。ひ。た。ま。ふ。○。エ。ホ。バ。ハ。か。く。い。ひ。た。ま。ふ。汝。ら。途。に。立。て。見。古。き。徑。に。就。て。何。か。善。道。ある。を。尋。ね。て。其。途。に。行。め。ざ。ら。ば。汝。ら。の。靈。魂。安。を。得。ん。然。と。彼。ら。は。た。へ。て。我。儻。ハ。う。れ。に。行。ま。し。と。い。ふ。我。ま。た。汝。ら。の。上。に。守。望。者。を。た。て。汝。の。聲。を。き。け。と。い。へ。り。然。と。彼。等。は。た。へ。て。我。儻。ハ。聞。じ。と。い。ふ。故。に。萬。國。の。民。よ。き。け。會。衆。よ。か。れ。ら。の。遇。と。こ。ろ。を。知。れ。地。よ。き。け。わ。れ。災。を。この。民。に。く。だ。さ。ん。の。彼。ら。の。思。の。結。果。な。り。か。れ。ら。我。言。と。わ。が。律。法。を。き。か。ず。し。て。之。を。棄。る。に。よ。り。我。請。ふ。乳。香。さ。たり。遠。き。國。よ。り。阜。滿。きた。る。ハ。何。の。ため。や。わ。れ。ハ。汝。ら。の。燔。祭。を。よ。ご。と。な。す。汝。ら。の。犧牲。を。甘。し。ど。せ。ず。故。に。エ。ホ。バ。ハ。か。く。い。ひ。た。ま。ふ。我。の。民。の。前。ハ。躓。礙。を。お。く。父。と。子。と。う。れ。に。躓。ふ。隣。人。と。の。友。倍。に。滅。ぶ。べ。し。○。エ。ホ。バ。ハ。か。く。い。ひ。た。ま。ふ。み。よ。民。北。の。國。よ。り。き。きた。る。大。なる。民。地。の。極。よ。り。起。る。彼。ら。ハ。弓。と。槍。を。と。り。殘。忍。に。し。て。憫。み。し。ら。う。の。聲。ハ。海。の。如。く。鳴。る。シ。オン。の。女。よ。か。れ。ら。ハ。馬。に。乘。り。軍。人。の。ご。と。く。身。を。よ。り。ひ。て。汝。を。攻。め。ん。我。儻。の。風。聲。を。き。く。た。れ。ば。我。儻。の。手。弱。小。子。を。う。む。婦。の。ご。と。き。苦。痛。と。劬。勞。わ。れ。ら。に。迫。る。

ナ 耶利米書 四十七 五 一
 ナ 耶利米書 四十七 五 二
 ナ 耶利米書 四十七 五 三
 ナ 耶利米書 四十七 五 四
 ナ 耶利米書 四十七 五 五
 ナ 耶利米書 四十七 五 六
 ナ 耶利米書 四十七 五 七
 ナ 耶利米書 四十七 五 八
 ナ 耶利米書 四十七 五 九
 ナ 耶利米書 四十七 五 十
 ナ 耶利米書 四十七 五 十一
 ナ 耶利米書 四十七 五 十二
 ナ 耶利米書 四十七 五 十三
 ナ 耶利米書 四十七 五 十四
 ナ 耶利米書 四十七 五 十五
 ナ 耶利米書 四十七 五 十六
 ナ 耶利米書 四十七 五 十七
 ナ 耶利米書 四十七 五 十八
 ナ 耶利米書 四十七 五 十九
 ナ 耶利米書 四十七 五 二十
 ナ 耶利米書 四十七 五 二十一
 ナ 耶利米書 四十七 五 二十二
 ナ 耶利米書 四十七 五 二十三
 ナ 耶利米書 四十七 五 二十四
 ナ 耶利米書 四十七 五 二十五
 ナ 耶利米書 四十七 五 二十六
 ナ 耶利米書 四十七 五 二十七
 ナ 耶利米書 四十七 五 二十八
 ナ 耶利米書 四十七 五 二十九
 ナ 耶利米書 四十七 五 三十
 ナ 耶利米書 四十七 五 三十一
 ナ 耶利米書 四十七 五 三十二
 ナ 耶利米書 四十七 五 三十三
 ナ 耶利米書 四十七 五 三十四
 ナ 耶利米書 四十七 五 三十五
 ナ 耶利米書 四十七 五 三十六
 ナ 耶利米書 四十七 五 三十七
 ナ 耶利米書 四十七 五 三十八
 ナ 耶利米書 四十七 五 三十九
 ナ 耶利米書 四十七 五 四十
 ナ 耶利米書 四十七 五 四十一
 ナ 耶利米書 四十七 五 四十二
 ナ 耶利米書 四十七 五 四十三
 ナ 耶利米書 四十七 五 四十四
 ナ 耶利米書 四十七 五 四十五
 ナ 耶利米書 四十七 五 四十六
 ナ 耶利米書 四十七 五 四十七
 ナ 耶利米書 四十七 五 四十八
 ナ 耶利米書 四十七 五 四十九
 ナ 耶利米書 四十七 五 五十

なんぢら田地に出る勿れまた路に行ひなかれ敵の剣と畏怖四方にわれあり 我民の女よ麻衣を身に
 まどひ旅のうちにもろび獨子を喪ひしごとくに哀みていたく哭けり 聖滅者突然に我らに來るべけれ
 かり ○われ汝を民のうちに立て金を贖る者のごとくなし又城のごとくあすてり汝をしてるの途を知し
 めまた試みしめんためあり 彼ら皆いたく憐れる者なり 勇行者なり 誘る者なり 彼らハ劍のごとく鐵の
 ごとし 害邪ある者なり 轡ハ火に焚け鉛ハつぎ鑄匠ハいたつらに鑄す悪者のまだ除かれざれどなり
 ハバ彼らを棄たまふによりて彼等ハ棄られたる銀と呼べれん
 耶利米記 一 エホバよりエリミヤにのぞめる言云ふ 汝エホバの室の門にたち其處にてこの言を宣て言へ
 エホバを拜まんとてこの門にいりしエホバのすべての人よ エホバの言をきけ 萬軍のエホバの
 神かくいひたまふ汝らの行を改めよさらばわれ汝等をこの地に住しめん 四 汝らハ是ハエホバの
 殿なり エホバの殿なり エホバの殿なりと云ふ偽の言をたのむ勿れ 汝らもし全くの途を行を改め人
 人との間を正しく躡き 異邦人と孤兒を躡け 無毒者の血をこの處に流さず 他神に從ひて害をまね
 かすバ 我なちらを我汝等の先祖にわたすこの地に永遠より永遠にいたるまで住しむべし ○ 八
 汝らハ益なき偽の言を頼む 汝等ハ益み教し姦淫し妄りて善ハバに香を焚き汝らがまらざる他の神
 にまたらがふなれど 我名をもて稱へらるゝこの室にきたりて我前にたち我らにてこれらの憎むべきことを
 行ふとも憚はるゝなりといふ何れや わが名をもて稱へらるゝ此室に汝らの目にハ監視の巢と見ゆ
 るや我も之をみたりとエホバのいひたまふ 汝等わが初めシロに於て我名を置し處にゆき 我ハイスラエル
 の民の惡のために其處になせしところのこのことをまよ エホバのいひたまふ今汝ら此等のすべての事をなす

七 耶六八
 八 耶六八
 九 耶六八
 十 耶六八
 十一 耶六八
 十二 耶六八
 十三 耶六八
 十四 耶六八
 十五 耶六八
 十六 耶六八
 十七 耶六八
 十八 耶六八
 十九 耶六八
 二十 耶六八
 二十一 耶六八
 二十二 耶六八
 二十三 耶六八
 二十四 耶六八
 二十五 耶六八
 二十六 耶六八
 二十七 耶六八
 二十八 耶六八
 二十九 耶六八
 三十 耶六八
 三十一 耶六八
 三十二 耶六八
 三十三 耶六八
 三十四 耶六八
 三十五 耶六八
 三十六 耶六八
 三十七 耶六八
 三十八 耶六八
 三十九 耶六八
 四十 耶六八
 四十一 耶六八
 四十二 耶六八
 四十三 耶六八
 四十四 耶六八
 四十五 耶六八
 四十六 耶六八
 四十七 耶六八
 四十八 耶六八
 四十九 耶六八
 五十 耶六八

又われ汝らに語り頻にかりたりたれども聽かず汝ら呼びたれども答へざりき この故に我シロになせしと
 多く我名をもて稱へらるゝ此室おなすは汝等が頼むところ我なちら汝らの先祖にわたす
 此處にあすべし またわれ汝等のすべての兄弟すはエホバのすべての裔を棄してどく我前より
 汝らをも棄つべし 故汝の民のために祈る勿れ彼らの爲に歎くなかれ求むるなかれ又我にどりなし
 をなす勿きわれ汝にきかじ ○ 汝かれらハエホバの邑とエホバの街になすところを見ざるか 諸子ハ
 薪を拾ひ火を燃き婦ハ麵を擗ねバツをつくりて之を天后にうなふかれら他の神の前に酒をそぎ
 て我を怒らす エホバのいひたまふ彼ら我を怒らすは是れおのの面を辱むるにあらすや 是故に主エホ
 バかくいひたまふ 祇よわが震怒とわが憤怒ハこの處と人と野の樹および地の果にうぐん且燃て滅
 ざるべし ○ 萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ汝らの犠牲に燔祭の物をわせて肉をくら
 三 ころわれ汝等の先祖をエホバより導きいだせし日に燔祭と犠牲に就てかりしごとく又命ぜし
 ことなし 惟われこの事を彼等ハ命じ汝ら我聲を聽べわれ汝らの神ぞかり汝ら我民とならん且わが汝ら
 に命ぜしすべての道を行みて福祖をうべしといへり されど彼らにきかず其耳を傾けずあれ其の惡き心
 の誠と剛愎あるとにまがひて行みまた後を我にむけて其面を向けざりき 汝らの先祖がエホバの地
 をいでし日より今日にいたるまでわれ我僕なる預言者を汝らにつかして日々晨より之をつかざりき
 れん彼らハ我にきかず其耳を傾けずして其項を強くしらの列祖よりも愈りて惡をなすかり 汝彼らに此等
 のすべてのことばを語るども汝にきかずかれらと呼ぶども汝にたへざるべし 汝かく彼らに語れこれ
 ハ其神エホバの聲を聽す所の罰を受ざる民かり眞實ならせしるの口に絶たり ○ (エホバの女よ) 汝の髪

一 耶六八
 二 耶六八
 三 耶六八
 四 耶六八
 五 耶六八
 六 耶六八
 七 耶六八
 八 耶六八
 九 耶六八
 十 耶六八
 十一 耶六八
 十二 耶六八
 十三 耶六八
 十四 耶六八
 十五 耶六八
 十六 耶六八
 十七 耶六八
 十八 耶六八
 十九 耶六八
 二十 耶六八
 二十一 耶六八
 二十二 耶六八
 二十三 耶六八
 二十四 耶六八
 二十五 耶六八
 二十六 耶六八
 二十七 耶六八
 二十八 耶六八
 二十九 耶六八
 三十 耶六八
 三十一 耶六八
 三十二 耶六八
 三十三 耶六八
 三十四 耶六八
 三十五 耶六八
 三十六 耶六八
 三十七 耶六八
 三十八 耶六八
 三十九 耶六八
 四十 耶六八
 四十一 耶六八
 四十二 耶六八
 四十三 耶六八
 四十四 耶六八
 四十五 耶六八
 四十六 耶六八
 四十七 耶六八
 四十八 耶六八
 四十九 耶六八
 五十 耶六八

に晝夜哭かん 嗚呼われ曠野に旅人の寓所をえんものを我民を離れてさりゆかん彼らひみな委すするも
 の悻れる者の族あればなり 彼らひ弓を援くがごとく其舌をもて偽をいだし彼ら此地において眞實の
 ために強からず惡より惡にすくみまた我を知ざるなりとエホバひひたまふ 汝らおのゝ其隣に心せよ
 何の兄弟をも信する勿れ兄弟ひみな欺きを余し隣とみ余識りよはればなり 汝らおのゝ其隣を取き
 かつ眞實をいはず其舌に誠をかたることを教へ惡を余すに勞る 汝の住居の議論の中にあり彼らに語
 のために我を誦とぞをいひたまふ 故に萬軍のエホバかくいひたまへり 禱より禱よ我かれら
 を鑄し試むべしわれ我民の女の事を如何にかすべきや 彼らの舌の殺す矢のどしこれら詭をいふまた
 其口をもて隣におだやかにかたれども其心の中に其害をはかるなり エホバひひたまふ我これらの事の
 ために彼らを罰せざらんや我心ひかくのどき民に仇を復さざるらん ○ われ山のたために泣き吠び野の
 牧場のために悲むこれら焚れて過る人なしまたこくに牛羊の聲をさかす天空の鳥も獸も皆逃てざりぬ
 われエルサレムを則擲とし山々の巢をささんだエホバの諸の邑々を荒して住む人なからしめん 智慧
 わりてこの事を曉る人ひ離る人エホバの口の言を受けてこれを示さん者の離るやこの地滅されきた野のど
 どく焚れて過る者あきにいたりし何故か エホバひひたまふ是彼ら我の前に立しどこの律法をす
 て我豊をかす之に徳をさるによりてなり 彼らひ心の剛愎あるどこの列祖たちがあれに教へし
 パアルとに従へり この故に萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ視よわれ彼等すなとイスラ
 萬民を食せ毒なる水を飲せ 彼らもろの先祖たちもまたさりと國人のうちには彼らを殺しまた彼らを滅し
 尽すまで其後に劍をつかはざん ○ 萬軍のエホバかくいひたまふ汝らよく考へ聖廟をよびきたれ又人を

日 耶五七八
 八 耶五八四三 聖五九
 九 耶五八五五
 十 耶五八六三
 十一 耶五八七三
 十二 耶五八八三
 十三 耶五八九三
 十四 耶五九〇三
 十五 耶五九一三
 十六 耶五九二三
 十七 耶五九三三
 十八 耶五九四三
 十九 耶五九五三
 二十 耶五九六三
 二十一 耶五九七三
 二十二 耶五九八三
 二十三 耶五九九三
 二十四 耶六〇〇三
 二十五 耶六〇一三
 二十六 耶六〇二三
 二十七 耶六〇三三
 二十八 耶六〇四三
 二十九 耶六〇五三
 三十 耶六〇六三
 三十一 耶六〇七三
 三十二 耶六〇八三
 三十三 耶六〇九三
 三十四 耶六一〇三
 三十五 耶六一一三
 三十六 耶六一二三
 三十七 耶六一三三
 三十八 耶六一四三
 三十九 耶六一五三
 四十 耶六一六三
 四十一 耶六一七三
 四十二 耶六一八三
 四十三 耶六一九三
 四十四 耶六二〇三
 四十五 耶六二一三
 四十六 耶六二二三
 四十七 耶六二四三
 四十八 耶六二五三
 四十九 耶六二六三
 五十 耶六二七三

に晝夜哭かん 嗚呼われ曠野に旅人の寓所をえんものを我民を離れてさりゆかん彼らひみな委すするも
 の悻れる者の族あればなり 彼らひ弓を援くがごとく其舌をもて偽をいだし彼ら此地において眞實の
 ために強からず惡より惡にすくみまた我を知ざるなりとエホバひひたまふ 汝らおのゝ其隣に心せよ
 何の兄弟をも信する勿れ兄弟ひみな欺きを余し隣とみ余識りよはればなり 汝らおのゝ其隣を取き
 かつ眞實をいはず其舌に誠をかたることを教へ惡を余すに勞る 汝の住居の議論の中にあり彼らに語
 のために我を誦とぞをいひたまふ 故に萬軍のエホバかくいひたまへり 禱より禱よ我かれら
 を鑄し試むべしわれ我民の女の事を如何にかすべきや 彼らの舌の殺す矢のどしこれら詭をいふまた
 其口をもて隣におだやかにかたれども其心の中に其害をはかるなり エホバひひたまふ我これらの事の
 ために彼らを罰せざらんや我心ひかくのどき民に仇を復さざるらん ○ われ山のたために泣き吠び野の
 牧場のために悲むこれら焚れて過る人なしまたこくに牛羊の聲をさかす天空の鳥も獸も皆逃てざりぬ
 われエルサレムを則擲とし山々の巢をささんだエホバの諸の邑々を荒して住む人なからしめん 智慧
 わりてこの事を曉る人ひ離る人エホバの口の言を受けてこれを示さん者の離るやこの地滅されきた野のど
 どく焚れて過る者あきにいたりし何故か エホバひひたまふ是彼ら我の前に立しどこの律法をす
 て我豊をかす之に徳をさるによりてなり 彼らひ心の剛愎あるどこの列祖たちがあれに教へし
 パアルとに従へり この故に萬軍のエホバイスラエルの神かくいひたまふ視よわれ彼等すなとイスラ
 萬民を食せ毒なる水を飲せ 彼らもろの先祖たちもまたさりと國人のうちには彼らを殺しまた彼らを滅し
 尽すまで其後に劍をつかはざん ○ 萬軍のエホバかくいひたまふ汝らよく考へ聖廟をよびきたれ又人を
 遣して智き婦をせねけよ 彼らに速にきたりて我儕のために聖哀しむ我儕の目に涙をこぼさせ我儕の目
 蓋より水を溢れしめん ヌオンより哀の聲きてゆ云く嗚呼われら滅され我ら痛く辱めらる我ら其地を
 去り彼らわが住家を毀ちたり 婦たちよエホバの言をきけ汝らの耳に其口の言をいれよ汝らの女に哭
 ことを教へん 汝らの隣に哀の歌を教ふべし 汝らの死のばりてわれらの窓よりいり我らの殿舎に入り
 外にある諸子を絶し街に於ける壯年を殺さんぞすれべかり エホバかくいへり 汝云ふべし人の屍を糞土
 のごとく田野に墮ちんまた收穫者のうしろに残りて斃めずにおる把のどとくからんと ○ エホバかくい
 ひたまふ智恵ある者ひの智恵に誇る勿れ力ある者ひ其力に誇るなかれ富者ひの富に誇ること勿れ
 誇る者ひこれを誇るべし即ち明哲して我を誦る事とわがエホバにして地に仁恵と公道と公義とを行
 ふ者なるを知る事はなり我これらを悦ぶありとエホバひひたまふ 汝ら悦ぶありとエホバひひたまふ 汝ら悦ぶありと
 べて陽の皮に割禮をうけたる者すなはちニシラトとエダとエラトとエラトとエラトとエラトとエラトとをり
 ての鬚を剃る者を罰する日きたらんやとすべし 異邦人の割禮をうけたまはたイスラエルの家も心に割
 禮をうけざればなり
 一 イスラエルの家よエホバの汝らに語たまふ言をきけ エホバかくいひたまふ 汝ら異邦人の途
 に效ふ勿れ異邦人之天にあらざるを懼るゝども汝らこれを懼るゝ勿れ 異邦人の風俗はむなし
 の崇むる者ひ林より斫たる木にして木匠の手に斧をもて作りし者あり 彼ら銀と金をもてこれを飾り
 釘と錐をもて之を堅めて揺動かざらしむ 此の圓柱のどとくにして言とすまた歩むて足能はざるによ
 りて人にたざらる是は災害をくだし亦は福祉をくだすの權なきによりて汝らこれを畏るゝ勿れ ○

日 耶五七八
 二 耶五八四三 聖五九
 三 耶五八五五
 四 耶五八六三
 五 耶五八七三
 六 耶五八八三
 七 耶五八九三
 八 耶五九〇三
 九 耶五九一三
 十 耶五九二三
 十一 耶五九三三
 十二 耶五九四三
 十三 耶五九五三
 十四 耶五九六三
 十五 耶五九七三
 十六 耶五九八三
 十七 耶五九九三
 十八 耶六〇〇三
 十九 耶六〇一三
 二十 耶六〇二三
 二十一 耶六〇三三
 二十二 耶六〇四三
 二十三 耶六〇五三
 二十四 耶六〇六三
 二十五 耶六〇七三
 二十六 耶六〇八三
 二十七 耶六〇九三
 二十八 耶六一〇三
 二十九 耶六一一三
 三十 耶六一二三
 三十一 耶六一三三
 三十二 耶六一四三
 三十三 耶六一五三
 三十四 耶六一六三
 三十五 耶六一七三
 三十六 耶六一八三
 三十七 耶六一九三
 三十八 耶六一〇三
 三十九 耶六一一三
 四十 耶六一二三
 四十一 耶六一三三
 四十二 耶六一四三
 四十三 耶六一五三
 四十四 耶六一六三
 四十五 耶六一七三
 四十六 耶六一八三
 四十七 耶六一九三
 四十八 耶六二〇三
 四十九 耶六二一三
 五十 耶六二二三